

コラム

《腰折れ文》 十九、

渡邊澄子（会員）

三月号だが書いているのは一月で感覚も内容も一月。前号の執筆後、新聞三紙（朝日・東京・琉球新報）から切り抜いた私にとって詳述したい重要記事が山をなす。取捨選択に迷う。

何と言っても事件性最大は沖縄問題。県民の要望による辺野古基地賛否の県民投票に全県民参加を求める県民の声を無視して投票に不参加を表明している五市は「自民党系の議員や首長」という。投票したいのにできない市民は宜野湾市で73割（その一人、一橋大学院生が市役所前でドクターストップがかかるまでハンスト。その間、県内外から応援・激励続々）、市民として玉城知事も投票できない沖縄市は78割という。市民の声を圧殺した不参加は民主主義に反し、法学者による投票権を奪う

ことの違憲性が述べられてもいる。投票権剥奪に賠償請求訴訟やリコールによつて首長に迫る運動も進められている。もはや沖縄一県、日本一国の問題を越えて世界の耳目を集める問題になっている。取りあえず工事中止をトランプ大統領に求める嘆願署名が国内外の賛同者によつて規定数の倍を超える、私の一筆も含む二十万超筆が寄せられ、ホワイトハウス前では連日直訴集会が開かれている。市民の参加への強い意志を踏みにじつての不参加強行を、「自衛隊を正規軍に変貌させたい政権は、沖縄を一段と軍事の島にしたい。辺野古はその野望の拠点」（東京新聞）なので全県一斉ではなく不参加市による「穴あき」にして、効果を薄めなければならぬのだらうの分析は

真つ当だろう。

市民の権利を蹂躪してまで政権に忠義だてする価値ありと五首長は本気に考えているのだらうか。基地の完成時期、工費が当初の予測をはるかに超えるばかりか、世界的宝の自然環境を再生不可能にしてなお、普天間の代替基地としての機能不可能が明白になっているにもかかわらずの強行は、米国の要望隷従による基地増設で、普天間がなくなるなんてあり得ないと私には思われる。辺野古基地建設は目に余る憲法・法令違反の連続だが、安倍首相の珊瑚は移したとのとんでもないフェイク発言は菅氏の常用語「問題ない」で済ませる問題ではない。フェイクと言えば、近年の蔓延は無視できない。沖縄知事選挙時の酷さは言語に絶する。琉球新報社は「ファクトチェック取材班」を設けて毎号検証の記事を掲載している。フェイクもまことしやかに大量発信されると真実感を植え付けられる効果があるという。卑劣だ。

東京新聞の「税を追う」は極めて有益な企画で、納税者として我慢ならない真実を知らされる。辺野古埋め立て土砂その他にも言えるが、米軍絡みと見られるせいぜい三〇五億円の無人島の馬毛島を百六十億円で買うという。税金ですすよ。安倍首相の妻同伴の外遊は頻繁だ。外交上必要なのだらうが国益成果がよくわからない。森友問題は未解決なのに平然と手を振り手をつないでタラップを登る映像に、任期中に大名旅行で世界旅行をするのかと皮肉りたくなる。昭恵氏にかけた税金の額を知りたい。

その他問題は山ほど。世界最悪の借金国なのに専守防衛はみ出しの官邸主導の「空母化」を含む龐大な防衛費、許しがたい厚生労働省問題、麻生氏始めのジェンダー差別、呆然とした正則学園理事長への早朝挨拶等々、この国はどうなつてしまふんだらう。不安が募る。